

## 話題86 ティータイム(13) 「老人保健施設で思う‘人の寿命’」

尊敬する老師の言葉である。「人は、病気で‘死’を迎えるのではない。‘寿命’で亡くなるのです」と。

天寿とも表現される。与えられた寿命には長短はある。背景にあるその長短の意味は、人の知恵で図り知ることはできない。言葉としての寿命は、それなりに理解はできるものの、それを実感として受け止めることは至難の業である。

「寿命」には生き抜いた全体の長さ、健康寿命がある。脳卒中での寝たきり。経管での栄養の補給。発語はなく、コミュニケーションは取れない。しかし、家族の暖かい介護がある。それでも、命には限りがあり、寿命があることは第三者にはよく分かる。

コミュニケーションには2者がある。自分と自分、自分と他者である。いずれのコミュニケーションも大切であり、生きることに意味を与える。表情、反応から読みとれるコミュニケーションもある。一方、コミュニケーションが完全なまでに断たれた状態もある。人工呼吸器での呼吸の管理、経管での食事の補給がある。

いつの時代においても思いやりの情は必要であろう。かつて、主治医が神経難病の患者さんの全身の中で、左手の小指だけがかすかに動くことに気づいた。この、小指でもってパソコンを用い、文章を綴ることを指導した。「つたえてください小指奮闘記」(医歯薬出版)としてまとめる機会があった

沈思黙考。静かに、深く考える時間は必要である。加えて、茶の間の話題として‘寿命’について気軽に取り上げることも意義のあるものと思われる。限りのある時間を、より大切に生きるために。そして、人に時を与えた偉大な存在に思いを馳せて。

老化とともに土いじりに興味を覚える。植物は、その根から限りなく命をつなぐ。春夏悪冬、時を超えて。ごく、ごく・・・自然に。